

氏名(本籍)	ひろ 廣	せ 瀬	きよ 清	と 人	(北海道)
学位の種類	博士(情報科学)				
学位記番号	情博第155号				
学位授与年月日	平成12年3月23日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科(博士課程)人間社会情報科学専攻				
学位論文題目	情動の評価説からみたストレッサー状況の想起に関する研究 —「フラッシュバルブ」記憶研究の批判的検討—				
論文審査委員	(主査)				
	東北大学教授	加藤	孝義	東北大学教授	国分 振
	東北大学教授	輪田	稔	東北大学教授	塚原 保夫
	東北大学教授	福地	肇		

## 論文内容要旨

本研究は、新奇性の非常に高いイベントによって強く<驚かされた>瞬間に、その時の状況が高度に<正確>に記憶されると言われる「フラッシュバルブ(以下、FBと略記)」記憶に関する従来の枠組みを批判的に検討し、新たな観点を提起することを目的とした。

第1章においては、従来のFB記憶研究の枠組みを検討し、その問題点に言及した。FB記憶においては、強く驚き<の結果として特殊な<写真的特性>のメカニズムを仮定する必要があるのか(例、ブラウン・カーリック)、あるいは通常の<リハーサル>メカニズムで十分説明がつくのか(例、ナイサー)という枠組みの中で、特殊メカニズム仮説が検討されてきた。研究者の関心はこの仮説の成立の是非に集中しており、FB記憶が如何なる状況において発生するのかについては十分議論されてきたとは言えなかった。

ところで、従来のFB記憶研究を整理し直すと、<写真的特性>あるいは<リハーサル>という枠組みに加え<重要性評価>が変数として含まれていた事実が明らかにされた。<重要性評価>は特殊メカニズム仮説を最初に提案したブラウン・カーリックのモデルにも含まれていたのであった。この変数の役割を検討することによって、<写真的特性>か<リハーサル>かという従来の二分法的枠組みが問題の本質を隠してしまう可能性があることが指摘された。この枠組みに代わり、<重要性評価><(写真的特性を含む)情動><リハーサル>の枠組みからFB記憶を検討し直して初めて、この記憶がほぼ網羅されたと考えられるのであった。

第2章においては、FB記憶研究における<重要性評価>の位置づけを検討した。ブラウン・カーリックの研究を再

検討すると、FB記憶の発生メカニズムにおいて、この変数が大きな役割を果たすことが明らかにされた。更に、この結果は彼らが主張していた「驚き」が「重要性評価」に先行する証拠には必ずしもならないことも指摘された。

従来の心理学的理論のうちでは、「情動の評価説」は認知メカニズムにおいて「重要性評価」が重要な役割を果たすことを主張する内容であった。この理論はストレス研究の成果を集大成させて成立したもので、「評価が情動の発生に先行する」がその要点であった。この点において情動の評価説はブラウン・カーリックのモデルとは著しい対立を示している。

次にストレス研究によって成立した理論をFB記憶に適用する妥当性を検討した。従来の心理学的ストレス研究においては、ストレスラーは「有害で脅威を含む否定的な」性質のイベントで、具体的には「地震、台風、戦争、テロリズム及びライフイベント」であることが既に明らかにされていた。それらはFBイベントと共通した性質を持っていることが指摘された。これは情動の評価説における研究対象がFB記憶のそれとほぼ同一であり、この理論をFB記憶に適用する妥当性を意味している。従ってFB記憶を「ストレスラー状況の想起」と換言しても、その研究対象はほとんど変化しないことになる。以上の検討を総括し、情動の評価説からFB記憶を検討し直すことが提起された。

ところで、最近のFB記憶研究の対象は「公知事件」に限定される傾向がある。ここまでに検討したようにFB記憶がストレスラー状況の想起であるならば、研究対象を「公知事件」に限定するのは妥当ではないと考えられる。この点を検討するために、本研究ではFBイベントを「公知事件」「私的出来事」として区分した上で研究を進めた。

第3章においては、FBイベントがストレスラーであること、及びFB記憶の発生メカニズムにおける「重要性評価」の役割の二点を主に検討することが研究の目的である。

「これまでに体験した「公知事件」「私的出来事」のそれぞれにおいて、最も「驚いた」事件（出来事）」の想起に関し、自由記述項目を含む質問紙を作成し、集合配布方式によってテストリテスト法で実施した。テスト対象は青年層及び中高年層で、有効な対象者数は「公知事件」を想起した青年層が91人（研究1）（以下、同様な意味を「青年層・「公知事件」と表記する）、中高年層・「公知事件」が65人（研究2）、青年層・「私的出来事」が67人（研究3）及び中高年層・「私的出来事」が62人（研究4）であった。テストリテスト間の実施間隔は全研究において約6カ月であった。

研究1から4の自由記述を分析した結果、「公知事件」において想起されたイベントは「地震、台風、戦争、テロリズム及び殺人」で、他方「私的出来事」におけるそれは「ライフイベント」に集中していた。それらのイベントは、従来のストレス研究において例証されていたストレスラーと内容的にはほぼ一致していた。

テストリテスト法における想起の一貫性を「正確さ」の指標とし、「重要性評価」「写真的特性」「リハーサル」等の変数が「正確さ」に及ぼす影響を検討した結果、研究1以外の全てにおいて一貫して「私にとっての重要性」と「正確さ」の間に有意な関連がみられた。研究1では「重要性評価」「写真的特性」「リハーサル」の全変数が「正確さ」と有意な関連を示さなかった。この理由は統計的検定力の低さのためである可能性が指摘された。

「写真的特性」と「正確さ」の関連は全ての研究においてほぼゼロであった。また「リハーサル」と「正確さ」は研究3においては有意な負の関連がみられたが、それ以外の研究においては有意な関連はみられなかった。

以上の結果から次の三点が示唆された。第一点目は、FB記憶は「地震、台風、戦争、テロリズム及びライフイベント」を中心としたストレスラー状況の想起であった。第二点目は、FB記憶の発生メカニズムにおいて「重要性評価」が重要な変数である事実が明らかにされた。第三点目は、「重要性評価」が「公知事件」「私的出来事」の発生メカニズムにおいて共通して中心的役割を果たしていることが明らかにされた。

これらの点から、FB記憶をストレスラー状況の想起として包括的に扱うことが可能であり、更に情動の評価説を適用する可能性が示唆されたと言える。

第4章においては、FB記憶に情動の評価説モデルを適用する妥当性を定量的に検討することが目的である。第3章では、FB記憶の発生メカニズムの原因が「重要性評価」なのか、あるいは「驚き」なのかについては明確な結論を得られなかった。第4章においては、第3章の「公知事件」の自由記述で想起された度数が多かった「地下鉄サリン（研究5）」、及び「私的出来事」でその度数が多かった「身近な人物の死（研究6）」を対象に、研究1から4と同様な方

法で研究を実施した。有効な対象者数は研究5で176人、研究6で153人であり、いずれも青年層であった。

研究5、6においては、共分散構造分析を中心的分析方法に用いて結果を整理した。この方法を用いて<重要性評価>が<（驚きを含んだ）情動（以下、「情動」と略記）>の発生に先行することを主張する情動の評価説モデルと多変量データの適合度を検討した。

「地下鉄サリン」「身近な人物の死」の結果は次の通りであった。研究5のモデルの適合度はGFI=0.894で、<重要性評価>から<情動><リハーサル><その他の記憶>へ向かうパスのうち、<その他の記憶>へのパスを除き構造変数間の決定係数は0.3以上であった。それらの結果は情動の評価説モデルが採択可能であることを示唆するものであった。また研究6におけるモデルの適合度はGFI=0.931で、構造変数間の決定係数はいずれも0.4以上であり、そのモデルの適合度は極めて高いことが明らかにされた。

以上の結果から次の二点が示唆された。第一点目は、FB記憶の発生メカニズムにおいて<重要性評価>を原因と仮定する情動の評価説モデルを適用する妥当性が高いことであった。第二点目は、情動の評価説モデルが「地下鉄サリン」「身近な人物の死」に共通して適用可能な事実であった。

これらの点は、FB記憶がストレッサー状況において発生する想起であり、そして情動の評価説モデルを適用することの妥当性を主張する本研究の仮説を支持する結果と言える。

第5章では、本研究を全体的に考察し、以下の結論を述べた。それは、FB記憶を情動の評価説の観点から検討し、ストレッサー状況の想起として包括的に検討することが妥当であるという結論であった。

以上の各章の検討を通し、本研究により得られた成果は、これまでにない新しい観点からFB記憶を検討し直したものである。この意味において、今後のFB記憶研究の発展に寄与できたと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

「フラッシュバルブ(FB)」記憶は、非常に新奇性の高いイベントを経験した際、強く驚いた瞬間の状況が正確に記憶される現象であると言われている。この現象は写真的な特殊メカニズムによって発生するか否かが論点になっている。本論文は、先行研究において議論の対象となっている FB 記憶研究の枠組みを批判的に検討することによって、この現象に新たな視点を提起したもので、全編 5 章より成る。

第 1 章は、FB に対する対比的論点である特殊メカニズム説と通常メカニズム説とを中心にしながら先行の諸研究を概観し、FB 記憶は統制困難な天災、人災、ライフイベントなどにおいて発生するストレス状況の想起として考察することがより適切な FB 記憶に対する仮説であることを提案している。この新しい仮説は、ひとがストレスと出会ったとき、そのストレスがどのような意味合いを持つかということについての評価が最も重要であるとするもので、情動の評価説といえるものである。

第 2 章では、前章で提唱した情動の評価説の適用可能性が詳細に展開されている。

第 3 章では、自由記述法によって得られた FB 記憶事例を考察して、その記憶はストレス状況において発生し、またその正確さはストレスの意味合いの評価によって規定されることを明らかにしている。これらの結果は FB 記憶研究における特殊メカニズム仮説に対して修正を要請する重要な知見である。

第 4 章では、共分散構造分析を用いて、ストレスの意味合いの評価が想起の正確性を規定するとした上記の仮説の妥当性を定量的に評価し、この仮説のモデル適合度が高いことを示している。

第 5 章は総合的考察及び結論である。

以上要するに、本論文はこれまで関連が指摘されていなかった FB 記憶研究とストレス研究との成果を結びつけ、いわゆる FB 記憶を新たな枠組みで検討する視点を提供する成果をあげたものであり、情報科学の発展に寄与するところが少なくない。

よって本論文は、博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。